川端康成全集

第九卷

舞　姫

新潮社

川端康成全集第九巻

舞姫

昭和四十四年十一月二十日　印刷
昭和四十四年十一月二十五日　發行

定價　千三百圓

著者　川端康成
發行者　佐藤亮一
印刷者　塚田重
印刷所　塚田印刷株式會社
原色版　半七寫眞工業株式會社
製本所　新宿・加藤製本所
東京都新宿區矢來町七一
發行所　株式會社　新潮社
電話東京(〇三)二六〇―一一一一
〒一六二　振替東京八〇八番

亂丁本、落丁本は本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Yasunari Kawabata Printed in Japan 1969

第九卷

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

舞姫……七
たまゆら……二三三
冬の半日……二五一
少年……二六三
岩に菊……三七一

舞

姬

舞

姬

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

皇居の堀

東京の日の入りは四時半ごろ、十一月のなかばである……。

タクシイがいやな音を立ててとまると、うしろから煙をふき出した。

炭の俵とまきの袋とを、うしろにつけた車だ。ゆがんだ古バケツもぶらさげてゐる。

あとの車の警笛に振り向いて、

「こはい。こはいわ。」

と、波子は肩をすくめると、竹原に寄り添つた。

そして、顔をかくさうとするかのやうに、手を胸まであげた。

竹原はその波子の指先きがふるへてゐるのにおどろいた。

「なにが……？　なにがこはいんです。」

「見つかるわ。見つかりさうですわ。」

「ああ……。」

さうかと思つて、竹原は波子を見た。

日比谷公園の裏から皇居前の廣場にはいる、交叉點のまんなかで、車のゆききの多い道だし、ゆきの多い引け時だから、二人の車のうしろに二、三臺とまり、左右を流れる車がつづいた。

うしろにつかへた車がバックすると、その明りが二人の車にさしこんだ。波子の胸の寶石がきらめいた。

波子は黑いスウツの左の胸に、ブロオチをつけてゐた。細長いぶだうの形で、つるは白金、葉は青いくすんだ石、それに幾粒かのダイヤの實があつた。

首飾りに合はせて、眞珠の耳飾りもつけてゐた。

しかし、耳の眞珠は髪の毛に見えかくれするほどだつた。首の眞珠も、白いブラウスのレエスの飾りで、あまり目立たなかつた。レエスは白と思へるが、薄く眞珠色なのかもしれない。

そのレエスの飾りは、胸の下の方まであつたが、やはらかくいいもので、むしろ年齢の氣品を添へてゐた。

さうしておなじレエスのえりが、立てたといふほど高くはなく、耳の下あたりからフリルを取つて、そのひだは前へ來るにつれて、圓みが深まつてゐる。細い首にやさしい波がゆらめいてゐるやうだ。

薄明りのなかで、波子の胸の寶石のきらめきも、竹原に訴へるやうだつた。

「見つかるつて、こんなところで、だれに見つかるんです。」

「矢木にだつて……。それから、高男にだつて……。高男はお父さん子ですから、私を見張つてますのよ。」

「御主人は京都ぢやありませんか。」

「わかりませんわ。それに、いつ歸るかしれないわ。」

と、波子は首を振つて、

「竹原さんがこんな車に乘せるからよ。竹原さんは昔から、こんなことばかりなさつてるのよ。」

しかし、車はいやな音をひきずつて動き出した。

「ああ、動いた。」
と、波子はつぶやいた。
交叉點の眞中で煙を吐いた車を、交通巡査も見てゐたが、とがめには來なかつたから、とまつてゐたのは、ほんの短い時間だつたらう。
波子は恐怖がほほに殘つてゐるかのやうに、左手をほほにあてた。
「こんな車に乘せたつて、しかられたが……。」
と、竹原は言つた。
「人をかきわけて逃げるやうに、公會堂を出て、波子さんが、そはそはしてゐるからですよ。」
「さう？　自分では氣がつかなかつたけれど、さうかもしれませんわ。」
波子はうつ向いた。
「今日だつて、うちを出るときに、ふつと指輪を二つはめてみたりするんですの。」
「指輪？」
「さう。主人の財産ですから……。もし主人に出會つたら、寶石がまだある、自分の留守中になくならなかつたと思つて、矢木はよろこび……。」
と、波子が言ふ時に、また車はいやな音をさせてとまつた。
こんどは運轉手がおりて行つた。
竹原は波子の指輪を見ながら、
「矢木さんに見つかつた時の用心に、寶石をつけてらしたんですか。」
「さう、はつきりぢやなく……、ただふつと。」

「おどろいたもんだ。」
しかし、波子は竹原の聲も聞えぬかのやうに、
「いやですわ、この車……。惡いことがあるわ。こはいわ。」
「ひどい煙を出してますね。」
と、竹原もうしろの窓を見て、
「かまのふたをあけて、火をおこすらしい。」
「地獄の車ですわ。おりて歩いてはいけませんの？」
「とにかく出ませうか。」
竹原はあけにくいとびらをあけた。
皇居前の廣場へ渡る、堀の上であつた。
竹原は運轉手のところに行つて、波子を振り向いた。
「お歸り、いそぎますか。」
「いいえ、よろしいんですの。」
運轉手は長い古鐵の棒を、かまの腹につつこんで、がちやがちやまはしてゐた。火を扇ぐものだらう。
波子は人目をさけるやうに、堀の水を見おろしてゐたが、竹原が近づくと、
「今夜はうちに品子がひとりだと思ひますの。あの子は、私の歸りがおそいと、どうしてた、どこへ行つて來たと聞いて、少し涙ぐみさうになつたりしますけれど、心配して言ふだけで、高男のやうに、私を見張つてるわけぢやありませんわ。」
「さうですか。しかし、今の寶石のお話ね、おどろきましたね。寶石はもとからあなたのものだし、

やはりこれまで通りに、おうちの暮しのことは、一切あなたの力でやつて來てるんでせう。」
「さうですわ。力はありませんけれど……。」

「あきれた話だ。」
と、竹原は波子の力ない姿をながめて、
「ぼくには、御主人の氣持が不可解ですよ。」
「矢木家の家風ですわ。結婚した時から、一日も變らない、習はしですもの。竹原さんも、昔からよく、ごぞんじぢやありませんか。」
波子は言ひつづけた。
「結婚前からかもしれませんよ。主人の母の代からの……。母は矢木の父に早く死に別れて、女手ひとつで、矢木を學校へあげて來たんですから。」
「それとは、わけがちがひますよ。また、あなたの、いはば持參金で、樂に暮してゐられた戰爭前とは、わけがちがふでせう。矢木さんにも、わかり過ぎてるはずだ。」
「わかつてますわ。でも、人間はそれぞれ悲しみを、背負つてゐますからね。矢木がさういふんですの。悲しみがあまり重いと、そのほかのことでは、知つてゐてわからないこと、どうしやうもないことも、出來て來ますわ。それは私もおたがひに、さうだと思ひますの。」
「ばからしい。矢木さんの悲しみは、なんだか知らんが……。」
「日本が敗けて、矢木の心の美がほろんだと、いふんですの。自分は古い日本の亡靈だ……。」
「ふうん。その亡靈の世迷言で、波子さんの所帶の苦勞を、見て見ぬ振りしようといふ……？」
「見ぬ振りどころぢやありませんの。物の減つてゆくのが、矢木は不安でしかたがないの。ですから、

私のやり方を監視してゐるのよ。こまかいお金に、いちいち苦情を言ふのよ。なにもなくなつた時に、矢木は自殺するつもりぢやないかと思つて、私はこはいんですの。」

竹原も少し寒けがした。

「それで、指輪を二つ、はめて出られたわけですか……。矢木さんは亡靈どころぢやないでせうが、波子さんはなにか亡靈につかれてゐるかもしれませんね。しかし、お父さんの卑怯な態度を、お父さん子の高男さんは、どう見ていらつしやるんですか。もう子供ぢやないでせう。」

「ええ。惱んでゐるやうですわ。その點では、私に同情してますの。私の働いてゐるのを見て、學校をやめて働くつて言ひますけれど、あの子は、父を學者として、絶對に敬ひ通して來た子ですから、もし父を疑ひ出すと、どうなりますか、おそろしいですわ。でも、こんな話、こんなところで、もう……。」

「さう。いづれ落ちついて聞きませう。しかし、あなたが今のやうに、矢木さんをこはがるのは、見るにしのびないな。」

「すみません、もういいの。ときどき、恐怖の發作が起きるんですわ。てんかんか、ヒステリイみたい……。」

「さうですか?」

竹原は疑はしげに言つた。

「ほんたう。車のとまつたのが、いけないのよ。もうなんともありません。」

と、波子は顔をあげて、

「きれいな夕やけですわ。」

その空の色は、首飾りの眞珠にも、うつるやうであつた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com